

元熙論

三浦 晉

一元氣

名づけやすからざる者あり。暫かつて一元氣といふ。一元氣宇宙に充滿して、秋毫の末をもものこさず、よくわかち、よくあはせ、生々化々して端倪をみず。天外をつゝみ、地内にやすんず。然して兆朕をみざるの始より、万像森羅たるにいたる迄、混然としておともなく、かもなき、自然なり。曰天地、曰男女、曰生死、曰禍福、より、粲然としてみつべく、きくべきにいたる迄、行として対あるは、自然の理也。必対あるものは自然なり。曰天地、曰男女、曰生死、曰禍福、行として此対をの、天は極て大にして、地は至て小也。地、天に比すれば一微塵なりといへども、天地相依がるゝものなし。地は天の正中に在て、ゝゝゝ、す動かず。天は地をつゝんで暫くもゝゝゝ、する事をやめず。てたつ。地は天の正中に在て、ゝゝゝ、す動かず。天は地をつゝんで暫くもゝゝゝ、する事をやめず。是誰かなす処ぞや。今人形声臭味をみざるを以て多くは察せず。今人さして空といふも、是氣の塞れる也。氣のみつべきものは空間に充塞する氣也。しかれども氣の全体にあらず。一元氣は天地万物を有質無質をあげてのこすことなし魚、水中に生じて水をしらず。人、氣中に生じて氣をしらず。人、水中に手を入れれば、自然肌と水との隔るを覚ふ。又氣中に黙座して察するに、空間と我肌膚との隔るを覚へず。唯、肌膚の衣帯のふるゝ処、手足の物に接する処と、日にてらされ、風にふかれて、始て彼と我との隔る事を覚ふ。よつて人、氣中に生じて、氣をしらざる事をしるべし。

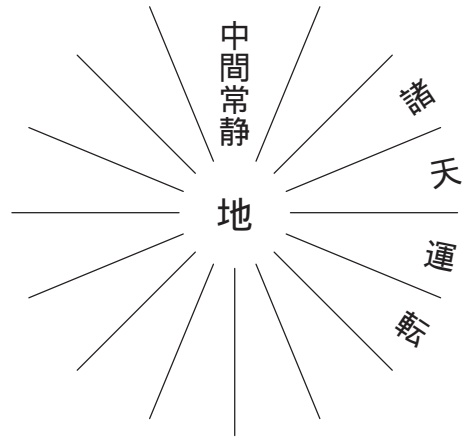
空

氣 古来、氣をゆふこと同じからず。元氣をさしていふ事有。陰陽にいふ事有。進退升降明暗によつていふ事有。香臭をいふ事有。血に配
 也。是をもつて一元氣の全体となさばあやまりおはらん。又、香臭をさしていふ事有。声臭色味をかねていふ事有。見がたきものは
 日に對してくらく、冷なる物をさしていふ事有。質に對していふことあり。人に於ては心性情慾をかねていふ事あり。氣動けば風と成、風
 眼にさへぎららず 夜氣眼をさへぎり、昼氣明を通ず 耳に応せず 声は自形なし。形あるものに觸て声をなす。氣動けば風と成、風
 實はみるべからざるにあらす 觸れば声あり。全く 物にふるれば声あり。笛をふき、鼓をうつ。よくその氣激動して
 声なきものにあらす 身に覺へず 手久しく挙げてだるく動かせば風を生ず。實は覺へざるにあらす 是を以て是を空といへど
 も、よくみるときは、氣充滿して髪を置の間も空虚をみず。蚊行喙息蠓飛蠕動みな食によりて命をたも
 つ 食の命をたもつものは、食よく物を生養するの氣をふくむゆへに食よく腹中に入。その氣升降生化して陽にして衛氣と成、陰にして、
 營血と成、よく物を養ふ。食もし此氣なくんば、いかでか物を養はん。草木に水を灌ぐがごとし。此水直に入て枝葉華実と成にあら
 ねども、水氣養へば といへども、唯、呼吸有を以てなり 食の物を養ふは、各々具足の氣なり。人の呼吸する物は天地の氣な
 り。食の氣、独生をたもたしむる事能はず。天地の氣、ひとり生をた
 もたしむる事能はず。水土糞壤、養ふは、各々具足の氣なり。寒暑陰暗の養ふは天地、糞壤の氣、ひとり生をた
 り草木を養ふ事能はず。寒暑陰暗の、ひとり草木を養ふ事能はず。、、、、、いてのこさざるものは一元氣なり 呼は此氣をすひ、
 吸は此氣をはく。すふ時此氣一身にわたり、四支百骸骨髓の中爪髮のすへいたり養はざる事なし。此
 氣しかく身にうくといへども、来るものは往く。暫くもとゞむべからず。此氣を吐て、天地と同じか
 らしむ。此氣をはくといへども、往ものは来る。暫くも此氣なふして、此生をたもつべからず。又此
 氣をすふ 此ゆへに大に嘯んとする時は、先、大に氣をすひ蓄へて始て嘯く事を得。大に嘯くの、ちは、從て大に氣をす
 ふ。息入時腹ふくるゝものは、氣内にみつる也。息出る時腹はそるものは、氣出て空虚あるべからざれば也 此氣よく運
 転すれば、各生成してその寿をたもつ。此氣よく運転せざれば、凝滯窒塞して、その病をかもし、其
 氣つくれば、即死す。さして空といひ、さして氣といふ。試に一面の団扇を地に置、一面の団扇を
 上よりかさねて、急にきひしく手をあぐれば、下なる団扇、上なる団扇につきて上り、間ありて離る。
 始あがるものは、二面の間に氣入事能はざれば也。間有て離るゝものは、此間に氣入ば也。又水入を

製するに、二孔をうがつ。器に水なき時氣器にみつ。一勺の水入ば一勺の氣出、水入盡せば氣出つくす。水出つくせば氣内にみつ。睫を、のひまも空処なし。故に一孔を閉て水を入れんとするに入ざるものは、氣、内にみつれば也。一孔を閉て水を出さんとするに出ざる者は、氣、入事を得ざれば也。杓をとりて水面に俯け、水中に入んとするにいら盾板様のもの真面にかざして行に、行なやむものは、盾のす。すこし斜になす時氣出る事声有て杓水に入。斜に側れば行事やすきものは、氣をひらくことの易ければ也。鏑矢のをそく、鋒矢のときも氣をひらくの難易也。然らば空も豈徒に空ならんや

天地

天天或は形質ありといひ、或は形質なしといふ。此間に有無をどく。其いはれなきに似たりといへども、天は積氣なり。豈形あらんや。質有ものは地につき、質なきものは天に歸す。塵埃目も見るべからざるがごとしといへども、すこしも質をなす時は、一旦氣の爲に動かされて飄揚すといへども、終に地に歸す。明鏡淨几、久しふして塵をつむを見てしるべし。質なきものは、地におらず、雲のごとく、煙のごとし。質有ものは、天に歸せず、雨のごとく、露のごとし。是によつて察する時は、日の明なるも、月のくらきも、形質ある事、儼然として珠をかけたるがごとくならんや。今是を疑はんとすれば、燐火龍燈のこる、その蹤跡をみずといへば、依然として光あり。況火木につひてもゆといへども、又その質なし。日已にかくのごとくんば、日月已にかくのごとくんば、天豈形質あらんや地の氣即陰陽の氣なり。象形よりして天地の氣といひ、往来進退よりして陰陽の氣といふ。天氣運遷してやまず。地氣静にして持す。地中を守つて動かす。天外に転してやまず。その中間常に静なり。その中間つねに静なりといへども、四方上下天地の全体をしるものは。四方上下をみず。今、四方といひ、上下といふものは、かりに吾をる処よりしていふ。もし上下といはゞ、地心即下なり。吾いたゞく処の上なり。上下は行処に従つて転ず。我下とする処、地心を通れば又上なり。北極をいたゞく人よりしていへば、南極をいたゞく人は、さか立がごとく、赤道をいたゞく人は、それはたつがごとし。天よりしていへば、中間の氣よく地を持する事、車の輪外にめぐつて輻外に散ずる事能はず。盡軸にむかひ軸又偏倚する事能ざるがごとし。地よりしていへば、中間の氣、盡地にむかひつがごとし。質氣天をのする事、車の軸輻をうけて外にめぐる処の輪陥り、墊ること能はざるがごとしの氣、盡地にむかひつがごとし。あるものを以てみれば、地氣正中より物を吸がごとく、天氣運遷する処の天氣に非ず。唯上の氣といふがごとし外より推がごとし。今



試に一條の繩をとりて提なんに、此繩自正しく地に下りむかふ。此繩上よりをすにあらざ。下よりひくにあらず。是質有物の氣、地にひき、地、質あるものをひかずんば、是を仰ひで立ん時、繩自堅、横さまになさん時、自横たはらん。又質なきものよりしてみれば、天氣是をすひ、地氣是をおすがごとし。雲のごとく、煙のごとし。得てとゞめんと慾すとも、得べけんや。已に氣有事かくのごとし。徒に是を空と謂てやまんや。中間常に静なる処の氣、升降相碍ずして静此静の字尋常に首過すべからずなる時は、質ある物、直に下り、質なきもの、直に上る。其氣うごく時は静なる時はさして空といひ動く時はさして風といふ升る物、升る事能はず雲煙横さまにとび降るもの、降る事あたはず雨雪斜に降る天体円なり。然

して地体も円なり。唯、山海あつて、すこしき凹凸あるのみ。質あるもの、下らざる事を得ず。質なきもの、上らざる事を得ず分つていへば、上るものは氣也。下るものは質也。すべていへば、升降二元氣の作用也。鳥のとんで天に入や、氣なり。久しふして地にくだらざる事能ざるものは質あれば也。人のたつて用をなすや、氣の動く也。故に、兩脚相扶けて危ならず。頭たち、手周旋して、耳目鼻口各その用をなす。眠るや、此氣の擷せざる也。故に兩脚有といえども、相持する事能はず。首かたむき、手たれて、耳目鼻口、各その用をなさず。動は氣の然らしむる也。静は質の自然なり。氣のしからしむるものと、質の自然とを合て用をなすものは、一元氣の作用なり天地円にして、上下なき時は、いづくをか下とさし、いづくをか側とせん。

天地の全形、目を以てみるべからず。心を以て推べし。上下四方なきゆへに、よく転じ、よく持し、よく升り、よく降る。もし上下四方有は、いかでか此妙をつくす事あらん。上下四方あらざんば、いかでか此妙をみるることあらん四方上下、人の強て按排するものにあらず。なしとするものは今日の作用をしらず。ありとするものは、元氣の妙用に通ぜず天地は、円なり。その理は、直し。その理は直しとは、日月回曲の処を照さず日月の食のごとき、寸分をいつわる事を得ず眼回曲の処を見ず。一円

中に直をくして、地も偏倚する事能はず。日月も私照する事能はず。故に、準繩以て天地を察すべし。たとへば、眼、物を見るがごとき。矢の直に行く、回顧せざるがとし。眸子のさす処一線直に透つて、万里の遠きも、一分をまぐる事を得ず。又眸子、物を見る処とみざる所との界、四方つねに分明ならず。唯、物を見る処とみざる所との界、四方つねに分明ならず。唯、茫茫然たるのみ。唯、玲瓏として物を見る処は一円中の一点なり。今方円縦、規矩準繩の方円をしるも、我眼の円と横一分をゆがむれば、規矩を以てせずして、目先しるものは、此直と正とあれば也。規矩準繩の方円をしるも、我眼の円と直とを具すれば也。我眼の円と直とは、天地の円と直と也。故に、智、円ならざれば天地をしらず。事物に通せず。物、我を隔て、百家の説にまどふ。行、直からざれば、こゝになづみ、かしこに躋く。智、直からざれば、姦邪放肆にして、顧るをしらず。行、円ならざれば、人の為に好悪せられ、跡なきにいたる事を得ず。

陰陽

陰陽は、一元氣の用をなす処也。陽氣は熱して明なり。陰氣は寒してくらし。二氣つねに往来進退してやまず。陽氣は、その光を日に寓するものなり。故に、日纔に地底を離るれば、その影こゝにてり、その暖こゝに在。日と地上と相距事数千里。その光をこゝに運び、其熱をこゝに運ぶとならば、日出て久しふして始めて明に、久して始めて熱すべし。天日出れば即てり、天日入は即寒し。しかれば光と熱とは、日に寓するや。唯、日よく熱と光とを畜へて、是をはなつとならば、実に来往の跡あらん。此陽天に在ては日と成。地に在ては火と成。日の光と、熱と、火の光と熱と各々の氣なり。故に寓すといふ。寓するものは有す。木をもんで熱あつまる。熱あつまつてひかる。ひかるものをさして火といふ。是陽熱と火とに寓するや、火出て又よく熱し、よく光る。是寓するに因て有するや、本は寓する処の氣、有する処の氣と隔されば也。もし寓する処の氣なふして、よく有する処の氣、用をなすとならば、往来進退なき事能はじ。もし往来進退ありとならば、火を挙る事久して、一室てり。目をひらく事久しふして、日月をみん。火いたつて物をてらすにあらず。物むかへて、火にてらさるゝにあらず。目至て物を見るに、又陰氣は暗ふして寒し。たとへば一室の内にあらず。物来て目にみらるゝにあらず。此氣よく隔たるゆへに来往ある事なし。又陰氣は暗ふして寒し。たとへば一室の内窓を開けば、玲瓏として明なり。閉れば即漫々として黒し。ひらく時の明、外より来るとならば、吾

いまだ外の明の減するをみず。外の明来らずとならば、閉るにのぞんで此暗何の処より来るぞや。もし此明、外より来るとなれば、ひらく時、その暗何の処に潜まり、とづる時その明何の処にかさる。表をたつれば表影地に有り質有ものは陰なり。陰氣の寓する処。寓すれば有するがごとし。其氣の隔ざればなり。質有ものは影随ふ。又来往ある事なし。此影表、もとより有するか。有するとならば、此影、日の為に短長横斜せられじ。有せずとならば、此氣いづれの処より来るぞや。此故に陽一分を進れば、陰一分を退く。陰一分を退れば、陽一分をすゝむ。進退来往して間断ある事なし。其玲瓏として明なる時昼也。昼といはざるものは陰陽二氣の作用をとけば也。万里の遠きも、みつへし。秋毫の微も、察すべし。かくみつべき、察すべきものは、陽氣の通ずるか、眼力の透るか眼力の透るものは、眼は陽氣の寓する処故に陽氣と徳を同ふし。通と透と又隔なし。眼閉て物をみず。天くれて物をみず。天あげ目をひらひて、万物玲瓏たり。よつて陽氣の作用をしるべし。日力よく通ずといはゞ、目を閉ればなんぞみざる。眼力よく透るといはゞ、暗中なんぞ物を見ざる陽ことかく陽の用をつくす。始て陽の全き物というべし。今日よく物を照して人をしてふべし。よつてしるべし。日も又場中の一物。目も又場中の一物たる事を大山前に待ち、洪河前に横れども、見る事能はざるものは、豈眸子の明ふならんや。陰氣の淬々として、ふかくさへぎれば也日は明を通して、盲者をして見せしむる事能はず。夜は暗く塞て明する処といひ、氣は陰なりといふ。後面の注を参照すべし。いはゆる明、玲瓏として通ずるものをもて本然といはゞ、黒滓々として遮るものは何ものぞ。黒滓々としてさへぎるものをもて本然といはゞ、明、玲瓏として通ずるものは何ものぞ。暗ふしてさへぎるものも一氣也。明にして通ずる物も一氣也。徒に日のみ明なりとおもふ人は、くらきを本然とし、明を客とす。徒に夜色は地影の行処とのみおもふ人は、明を本然とし暗を客とす明、日にあらず、暗、地影の行処にあらずといふにあらず。或は暗を主とし、或は明を主とす。未見透さざるなり。みな一元氣の作用をしらず、明されば暗おひ、暗されば明追ふ。何れをか客とし、何れをか主とせん。故に明絶せば、暗つきん。暗つきば、明絶せん。夫明は発揚の氣あり。暗は発揚の氣なし陽氣はつねにすゝむがごとく、陰氣はつねに退くがごとし。暗中に火を点するや、明すゝんで四方をてらす。暗退ひて四辺にさくるがごとし。暗はすゝんで明の分に入事能はず。明

はすゝんで暗の分に入。しかれども明一分を減ずれば暗一分をます。豈よく全くすゝまざるものなからんや。魚鱗草木も皆明を含む海水燐火魚鱗草木の光はみな陰分に得るがゆへに物をてらす事能はず。明を含んで物をてらさざるものは発揚の気なければなり。

炭は発揚の気少し。物をてらす事明ならず。焔は発揚の気多し。物をてらす事明也。豈明なるもの、みなよく物を照すといはんや。よつて思ふべし。日は陽氣の寓するもの也。日、明なるがゆへに、てらすといふにあらざり。

此処ひがたし。日明ならずといふにあらざり。日のよく発揚の氣を寓する事をいはんと也。

能てらし、能明なるもの、日に寓する也。日影の至らざる処くらし。日遠ふして也。冬寒し。陰の氣と

色とをしるべし。日の至る処、明なり。日近ふして也。夏熱す。陽の氣といるとをしるべし。或人の

日、日は現に象あり。故によく其光を天地にしく。今、予がいわゆる陰氣なるもの、其淬々として

黒きはみつべしといへども、其さす処をみず。予是に答へて日、くらければ眼に其くらきをみ

る。くらふして其外にくらきを見は、是をくらしといふべけんや。その上天地の間対なきものな

し。跡あれば対あり。夫、日月星辰の天度における整齊して一毫をたがへず。然れば、風雨陰霧のその間における錯雑して変態を盡すべし。況、十里風を同ふせず。百里雨を同ふせず。五運六氣、豈、よく世の変態をつくさんや。象有ものは、象

なきものに対す。陽象あり。陰もし象あらば、豈陽に配すべけんや。古米月をさして日の敵対とす。故に日を太陽と稱

るに對し、高きはひきくに對す。しかれば月を日の對とせんも亦可也。しかれども、日は陽氣の充滿する処、よく天下を昏ならしむるものや。よく天下をして昏ならしむるものは、よく天下を以て夜ならしむるものに対す。月は五星の風なり。五星つねに日を環つて進退す

月も亦日に随つてよく転ず。然して最下にあり。最下において、地体にかきがゆへにその体くへに、環つて進退す。日に象あり。象あるものに対すべからず。況、全く夜を以て出する事能はず。天下をして夜ならしむる事能はず。その体くらしといへども

猶よく明をかる。明なるものに対すべからず。日はよく熱して、月は寒する事能はず。太陰の名実に失せり。太陽と配して太陰といふべきは、唯、この陰氣は日はよくてらし。此氣はよくくらしむ。日はよく熱し。此氣はよく寒がらしむ。日はよく象あり。此氣は象なし

又曰、対なきもの、子何を以てか是に對せん。日對あるもの有て配す。豈我配するをまつべけんや。

唯、一元氣とは有無動靜明暗方円にあらず。纔に有無動靜明暗直円古来方円といつて直円といはず。方は造作に

を具す。方円の相對するは、日月の相對するがごとし。直円の相對するは、日と氣と相對するがごとし。いかんとなれば、円は形象有、円地日月のごとし。天地日月の円なるのみにあらず。露形水紋火煙水圀、ことごとく円形を具す。唯、物よつて横斜長短あるのみ。直横た

ゆれば平、傾れば斜、端と端とを合すれば円、是を折れば三角なるべく、四角なるべく、五角なるべく、千五角なるべし。又、一直の物を

以て一周転すれば、円なる事を得、一直物を以て四口に配すれば、四方を得、上下にをけば六合を得。故に直は自然也。方は有意也。其

説いかんとなれば、円は自然の形なり。故に上より臨み、下より望て側て見、傾けみれども、唯円也。転輾欹側すれ共、円を失せず。又自然にあらざるや、方に扁にして、方ならば四隅四隅なるものは、二面二面四隅いかなぞ。自然といはん方にして、方ならば、八隅、六面自然のものにあらず、唯扁



四隅二面は面あけてそなへざる事なし。唯一直上下左右より望んで其直を、



八角元來円は自然の形、六面直は自然の理、直

縁かたちをなせば本末あり。是が形をなざれば、一直本末なし。方となせば角あり。角あればつくる事あり。つきば陰陽をかたるにたらず。故に円は無意の形、有意の形、直は無形の理也。眼の直と円とを具する事前に己に是をいふ。方は有意といへ共、自然なるものは直中に是を有すれば也。円は端なし、方は端あり。円は転じ、方は転ぜずといはゞ端あり。転ぜざるもの直中に直可三円図一、直有す。円も亦端あり。円も又転ぜず。方も又転じ、方も亦端なし。よく心を潛すんばいかでか得る事あらん。

可三方図一



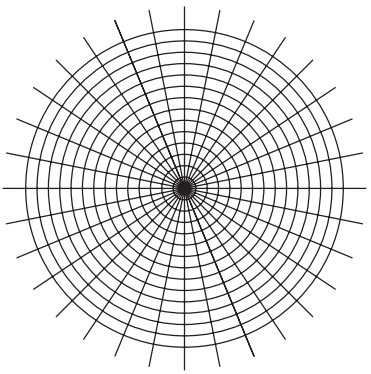
直

此條引而長

たるもの、混々然たるにいづる事をしらざるに似たり。一元氣は元來無窮故に、天地無窮故に、万物無窮。故に円一面を限れば、円の全体にあらず。唯円也。分界をたつものは、しばらく数をいふが為にまふくるのみ。たとへば、地まどか也。その上つねに静なる処も亦円也。月天も円也。日天も円也。衆星天も円也。宗動天も円なり。しかれば、其外よりして、外千萬億此円つくべからず。此円つくべからざれば、此直つくべからず。故こゝに無窮の図を顕してしめす。もし此円つくべしといはゞ、此外にひたすらに円をそへ、ひたすらに直をそへよいかんがおししてつくさん。縦此円や縦横転動をして極る事は得ず。然して本あり。未より以て無窮の妙用をしめすにたれり。方は造作にわたらざる事を得ず。然して涯分あり。方に対しての円、又、涯分なき事能はず。唯、一直一円、笑といへば陰陽なりしも、有に涯分区画を以てつくすべからず。又造作にわたらずといへば陰陽なりしも、有無動静方円の外といはゞ、又予がしる処にあらず。人々自意解すべし。いかんぞ喋々として口舌を以て論ずべけんや。問者點頭す。

寒 暑

此図引而重之



熱唯日より来るといはゞ、寒何れよりきたるぞや。寒暑は陰陽の気也。もし日唯熱すといはゞ、夏

至熱し、冬至寒すべきに、今、夏至を過て熱すゝみ、冬至を過て寒すゝむ。春秋二分、温涼ひとしかるべきに、秋分暑にたへず、春分寒にたへず正帯よりしていふ。是自寒暑の気の進退する有。唯日のみ熱するにあらざる事をしるべし。夏夜時として昼より熱し、冬日時として夜より寒し。変化参差たるものは、陰陽錯雜する也。陽氣すゝむ時、陰氣退く。陰氣すゝむ時、陽氣退く。此氣寒暑往来の氣はつねに後れて往来す。故に日退ひて暑すゝみ、日すゝむて寒又すゝむ。寒熱の往来するや、地上寒して、温地下に鬱す。夏は地上熱して、冷地下に聚る。盛夏金をとかし、石を焦すといへども、其陰をして失はしむる事能はず。盛冬地を裂、水を凝すといへども、その陽をしてつきしむる事能はず。盛冬器中に水をたくわふるに、氷る事甚しければ器わる。その氣の收斂する事をしるべし。夏日器中に物を貯ふるに、腐爛して器を敗る。その氣舒散することをしるべし。

水火

水火豈別物ならんや。此氣ふるゝ事陰にして水と成、ふるゝ事陽にして火と成。しらざるものは見て別物とし、しる者はみて一物とす。今こゝにもゆる火薪をはみつくせば、火随てきゆ。此火きへて、その熱、その物何れに歸りいづれにか歸りおさまるや。火きへ、水つきて、始めてその始をおもふべし。火を以て水を煮る。火きへて猶その熱を水に寓す。水の冷退ひて、那の一方にさざるや。久しふして旧きに依て冷や。此冷那の一方より来るや。水の冷、陽のわくに從つてつきさらば、長に熱すべし。しかれども此湯をして長く熱せしむる事能ざるものは、冷又つくべからざれば也。影像。悲歎豈他あらんや。吉にふれて歎ひ、凶にふれてかなしむ。今かなしめる心、即さきに歎へる心也。悲歎他心なしといへども、その己に発して歎となるや、歎転して悲となすべからず。己に発して悲と成や、悲転して歎となすべからず。元是一氣の用といへども、火又水となるべからず。水又火と

なるべからず五行家の説、五行生剋を以て作用をとく。千事万物みな然なり。しかれども生剋は物々みな始終を相なす。唯、一陰一陽相往來して生々化々するのみ。水よく火にかつ。火又水をかす。火、金にかつ。金、又火を隔つ。金、木にかつ。木又金を剋しむ。木、土にかつ。土又木を腐しむ。水よく木を生ず。木中又水あり。木よく火を生ず。木又暖氣をかつて生ず。火よく土を生ず。土中又火あり。土よく金を生ず。金さびて又土と成。火よく金を生ず。水中金あり。地上形をあらはずものは、火水土金水と含異のみ。しからば六といはんも可也。含異のもの、五行を有すといはゞ、五行も又五行を具すといはん。しかれども、五行は非情のもの、含異は有情のもの。五行と云も是也。又五行を四方中央に配することも、纔に北極以南、赤道以北にいふべきのみ。□□南極以北赤道以南、又配すべし。唯、水火位をことにするのみ。赤道をいたゞくの人は、未甞以前は、混沌然たり。甞して後はかゞ配し得ん。故に又配も又なすむべからず。五行は是也。生剋はなつむべからず。 粲々然たその粲々然たるもの、各生化して又混沌然たり。その粲々然たるの間も亦混沌然たり。其の混沌然たるの間も亦粲々然たり。人誠に混沌然たるに居て、粲々然たるに應ぜは、是を用ひてつくる事なけん。粲々然たるを見て、混沌然たるをしらずんば、知力恐らくは窮する事あらん。混沌然たるに処て粲々然たるをしらず。故に虚をふみ、空に駕して歸る事をしらず。人倫を土塊のごとくにして以て自得たりとす。粲々然たるに処て混沌然たるをしらず。故に死生に恐懼し、物我をへだて、禍福の相隣る事をしらず死の源は生るゝ日にあり。禍のみなもとは福なるの日にあり。財をつむの家は財散する事あり。財をつまざるの家は財散せず。子なきの人は、子の憂なし。財をつむの日の歡喜は、財散する日の悲をなす。子にわかるとの憂、子をうむの喜になる。ひきゞにおつる人は、高きにのぼれる人なり。一郷火あり。家々財を出し、老をたすけ、幼を携へ紛々然として、或はなき、或はさげふ。一貧者あり。妻子なし。人の家をかりておれり。火のおこるをみ、おもむろに出、静かにさげ、塗に一樽のすてたるをみて、よつてのみ恬然として人の奔走するをみる。此人は始種々の慶賀福沢をつまざる人也。故に此日に至つて失することもなく、かなしむ事もなし。此日大に憂る人は、さきに大に樂める人也。此日すこし失する人は、さきにすこしき得たる人也。こゝにくらき人は積て散せず。生れ死なざらん事を欲す。妾も又甚し。又しつていとふ人は、吉凶特質のさか。造化のわたくしなきひを出、高くふんでかへりみず。又世と異なりよくしり、よく処する人に至て始て得たりといふべきのみ。 造化のわたくしなきを察せず、道をとく事同じからず。学も又専門あり。己を己とし、彼を彼とすれば、各涯分あり。各涯分あれば、人の是非をきくに暇あらず。人の是非をきくに暇あらざれば、語て其心を忤る事能はず。訟を聞て其情を察する事能はず。つかふて其材をつくさしめず、悪んでそのよきをしらず。愛してその悪をしらず。学をおさめて、其意を得ず道をとく事同じからず。故に彼々が分を有し、己々が分を有す。各その分分せまければ、人と戦ざる事能はず。戦へども彼が非をならしむ、かをが善をとる事能はず。涯分あれば、せまからざる事能はず。涯分なくれば、人と戦ざる事能はず。戦して服せしむる事あたはず。我渠が是非をせめて、是非あたらず。渠をして我にふくせ

しむる事能はず。こゝに於て旗をとつて壇に上り、三軍を指揮し、天下をして了然とし、その是非をらしめ、その能をつくさしめ、其費を省しめ、よくその礼を損益せん事、必ず三教中の人に待事能はずしからざれば両可の言を設け、あるひは渾合の説をなす。悲夫。

物 氣

其既に形をしくや、天地日月山河草木人物各形あるもの也。形は象と質とをかねていふ已に形を各々になせば、氣も亦各々也。一元氣の未動ざるや、はかる事なし。動けば則形あり。動ざるとは動に對して静といふべからず。纒にて、然してのち天地万物ありといふにあらず。一元氣は天地万物と説は、静も亦しかるべし。又一元氣あつと同じく、始をみず。終をみず、動静つねに行れ。生化同じく行く形あれば声臭色味なき事あたはず。声臭色味も又氣なり。臭は香臭をかねて云。臭をば人さして氣といふ。声色味は、人未さして氣といはず。されどもみな氣なり。唯察せざるのみ。光彩も色なり。形摸而可知色等口可談耳可聽目可見声色臭味不然待耳目鼻口始可知耳聾間人書云其黒如何其白如何其苦如何其甘如何其香臭如何其清濁如何口不能談天地の氣激すれば風と成。風物に触れば鳴動す。摸写不親接其氣不可如何形容摸写可知暗中可知視而可知聽而可知人の氣激すれば、よく言語歌哭す。万物みな然り。但氣激すといへども、物によらざれば聲ある事能はず。但物によらざれば聲有事能はざるのみにあらず。物によらざれば、氣激せず。氣よく物を生じ、物よく氣を激し、氣よく物を激す。又端なきのみ。已に纒に形をなせば、聲なき事能はず。已に纒に形をなせば、臭なき事能はず。已に纒に形をなせば、色なき事能はず。已に纒に形をなせば、味なき事能はず。物誠に声臭色味なき事能はずといへども、その物によつて声にかつもの有。臭にかつものあり。色にかつもの有。味に勝もの有。声臭色味は、各々の氣也。元氣氣氤して万物を生ず。此氣なければ、このものを生ずる事能はず。此氣は賦与する處の氣此氣なければ此世をたもつ事能はず。此氣は各々の氣也。元氣物に賦与して各々の氣となる。各々の氣、元氣に外ならずといへども、已に各持する處あれば火氣水氣相隔るがごとし故に形をはなれて声臭色味立事能はず。形有て声臭色味な

き事能はず。声臭色味は天氣に属し、形は地体に属す。いはゆる各々の氣とは、天地の転持日月の明
 暗より、人は人の氣あり。物は物の氣あり声臭色味寒温升降みなかねいふ。磁石鉄をすひ、琥珀塵をすふがごとし。磁石
 と鉄と相さる事数寸。鉄より磁石自ひく。此間豈目と思慮とを以て察すべけんや。鉄は自感する
 のみ。鉄なき時、磁石鉄をひくの氣をやめんや。肉の器にある。人は未その腥を齟すといへども、猫
 兎はしる事有。盛夏のあつきも疝を病る人は戰栗す。己其氣に接せざるを以て豈この氣なしといふ
 べけんや。磁石よく鉄を引て、塵をひく事能ざるものは、磁石の氣、塵と相接せざれば也。琥珀よく
 塵を引て、鉄を引事能はざるは、琥珀の氣鉄と接せざれば也磁石と琥珀と塵と鉄とを一処に於て琥珀、磁石の磁氣をまげず、磁石、琥珀の氣をきへず。玄なるかな。石塵をひかざるを見、琥珀鉄をひかざるをみて、豈その氣なしといふべけんや。故に其氣よく人と感
 ずるものは、人その氣をしる。人と接せざるものは、人しらず。鼠は大なれども、猫兎を見てわしる。
 蛇は長けれども、蛞蝓をみてさく。もし其形の優劣をしていはしめば、老鼠長蛇かの猫兎と蛞蝓とを
 恐れんや草木水を得て榮へ、人物食を得ていく。其氣相あへば、生令行る。海參藥を見て流れ、蛞蝓塩にあふてむなし。其氣相背けば、化令行る。雨ふらんと欲して、礎湿ひ、霽なんとし
 て鳩雌をよぶ。彼豈知覚分別して、然して後陰霽をしらんや。此氣感ずれば相挽磁石と鉄との類相動かす雷声地を動かす、鐘音屋をうごかすの類、日を見、雪を見て、日明をはつ。声よ耳の宮商に於てし、目の明暗に於てし、鼻の香
 臭に於てし、口の苦甘に於てするがごとし色を見て心動き、雛を見て心いかる形未相近づかず。氣は早く相感ず。此氣接せざれば鼻の明暗に於て
 し、目の香臭に於てし、口の宮商に於てし、耳の苦甘に於てするがごとし。紅未紅ならず。醋未酸か
 らず。醋を得て始て紅に、麴を得て始て酸し。此紅此酸何より来るや。蓋氣得て色をなし、氣得て味
 をなすや。肉未甚腥からず。火又腥氣なし。火肉相得て腥も亦甚し。是氣々相得て臭をなすや。鐘
 鼓霽なんとし、声亮雨ふらんとし、音濁る。氣の声をなすにあらざんば、豈此声をしてよく變せ



物

へばこゝに鐘を敲す。東にきく事一里なれば、西南北も亦一里。上も又一里。地遮らずんば下も亦一里。香臭寒熱みな
 しかなり。偶かくの如くならざるは風之をたはませば也。人は自人の氣あり。白しらざるものは、腋臭の人、自その臭
 をしらざるがごとし。物自物の氣有。物々相接すればみるべし。接せざれば、みるべからず。人夜はをそるゝものは、
 夜氣にかたざればなり。相伴へば、小兒といへども安んずるものは、氣相持すれば也。偶をそれざる人は、その氣のよ
 ばなり

しめんや。声色臭味一定なるもののごとし。いふ心は、にがきは一定して苦し。甘きは一定してあ
 まし。赤きは一定してあかし。黒きは一定してくろししかれども此声色
 臭味は人の相接し、相感するよりして、此声色臭味他の物をして見せしめば、
 豈又一定なるべけんや。人の夜氣に接する物をみる事能はずして、梟はよくみる。人の昼氣に接す
 るや、よく物を見て、梟はみる事能はず。緑と黄との日に映ずるや、緑は緑にして黄は黄也。燭の光
 に映ずるや、緑は青きがごとく、黄は白きがごとし。日此色をもち来る歟。燭此色を奪ひ去るか。色
 日と燭とに因て転ずるか。目又よく転ずるか。日暮東辺に虹をみるがごとき、西人はみて、東人はみ
 ず。何ぞ裡面は淡して、表面はこき。中間の露日に映じて五色粲然たり。もし日によつて在といは
 る、目の転ずるに随つて色も又異なり。目此色をなすといはるゝ、日陰つて其色を失ふ。水上に月影を
 弄するも、其処に随つて異りしからば、色も一定すべけんや。嗜酒の人は酒を旨しといひ、酒を嗜まざる人はさして
 苦といふ。煙草を嗜むの人、その辛をしらず。嗜ざる
 人は、其辛にたへず。同じく人として尚其味こと成。物の声ある、聴者はきゝ、聲
 者はきかず。同じく人として尚その声ことなり。しからば声も豈一定とすべけんや人は寒にたへず。鳧は水寒をこのむ。人
 を以てみれば、水中すむべからず。魚を以てみれば、氣中居べからず。蠶は磐石を見てこへ、鼠は磐
 石を食て死す。塩は菜葉を蔵めてくちず。衣帛に入は腐爛す。感ずれば得。接せざればそむく。背
 くをみて、感ずるをしらず。感ずるを見て、そむくをしらず。豈声色臭味の説をしらんや。各々の氣も亦
 円なり。たと

機

ゆくとして一元氣にあらざる事なふして、一元氣の機に動以前一元氣は誠に思議し安からず。思議すべきは唯機か。その機ふかく察せずんばいかでかよく其玄を見ん。機は発動の機也。たとへば鳥をとらへて手にあるがごとし。未殺活に意なき時は、是を殺といふべからず。又活といふべからず。機は機に活さんとをもふ。則活の機已に殺し、已に活すものは、機以後の事。即跡也。殺活に意なき時、豈思議すべけんや。思議すれば、機うごく。故に一元氣は思議し安からず。思議すべきは機なり。機は陰たるべく、陽たるべき機なり。二元氣は明暗有無動靜故。此ゆへに一元氣の機をしらざれば、人をせむるに、其そなはらん事をもとむ。又よく此機をしる人は、剛者を剛につかひ、柔者をば柔にもちひ牛溲馬勃もその能をつくす事を得。なんの棄物かこれあらん。況や剛者に柔をせめ、柔者に剛をせむるをや。秀才大賢もその力をつくす事を得ず。なんぞその餘をや。此ゆへによく此機をしる人は、昼々の用をなし、夜々の用をなす故に、陰陽みだれず、天地位す。しらざれば昼夜の用をなし、夜ひるの用をなす故に、陰陽みだれ天地位せず。まとへる時は昼をみて夜をせめ、夜を以て昼をせむ。いかにぞ天地も否塞せざらん○対有ものは、皆機以後也。故に明なるものは暗き事能はず。くらきものは明なき事あたはず。有ものは無事能はず。無ものは有事能はず。動靜直円みなしかなり。よくくらからしめ、よく明かならしめ、よく有しめ、よくなからしめ、よく動がしめ、よく静ならしめ、よく円ならしめ、よくはくむるものは一元氣也。物誠にしからしむるもの有て、しからがごとし。ある人の曰、火無より生じて、よくもゆ。燃る時明也。きてへり又くらし。しかればよく明ならしめ、よくくらからしむるにあらずや。曰、否是をいふにあらす。火未生ぜざる前、さして是を火といふべけんや。火きへるとち、又これを火といふべけんや。已に是火暫時もくらきことあたはず。有無動靜直円をあげてみなしかり直円にもあらす、又豈これが外ならん。声臭蹤跡の端倪すべきなふして、よく事物を具足す。機已に動此動非三動けば陰あり陽あり。已に陰陽あれば形あり。可知覚自可形は相對せざる事能はず。故に形あれば、或は剛、或は柔、或は高、或は下、剛柔をなす事あたわず。よく剛ならしめ、よく柔ならしめ、高ならしめ、柔ならしめ、つくさしむるものは、一元氣也。此氣や天を運転してやすまず。地を維持してたゆまず。よく剛なり。目の明を隔てず。耳の聰を隔てず。香臭よく通じ、升降よく阻てず。四体のふるるにさゝへず。よく柔也。静なれば紙窓を透さず是を剛柔を以ていふべからず。天地の大なるも、此氣充塞するものは至大なり。一微虫といへども、よく其氣を具足するものは至小也。蜘蛛の子のはじめて巣を出るや、その細比類なり。しかれども、よく耳目手脚を具一元氣の作用その大みるべからず。その小みるべからず。其剛しるべからず。その柔しるべからず。剛柔にあらざるが故に剛柔の妙用をつくす。大小にあらざるがゆへに、よく大小の妙用ををつくす。有無動靜を諸象あげて皆しか也。よく其頭によつて、その微を察し、その機をみて、其玄を

おもへ。

数

数は無数に生じて、無数になる。其説いかんとなれば、一を積で十百千万相倍し、相什し、終に其終る処を見ず。その終る処を見ざるに至て数なしとせば、可ならんや。一を分つて三となす。毫釐秒忽目みる事能はず。術推事能はず。終にその盡る処をみず。その盡る処をみざるに至てなしといはゞ、何を積て一をなすや。故に数は無数に生じて、無数になる。無数即数也。故に一よりおこし得て九に至る。十又一也。百又一也。千万億も亦一也。此故に数は九にとゞまるといへども、唯、天地をかるべきものは一歟。一は、はじめてなれるもの也。二は、一と一にして、一に對するもの也。故に三は、二と一と、四は二と二と、五は一と一と一と一と六は二の三なるもの六八十に至て二をかさねてなる。五七九一の数によらざればならず。人あるひは五の数を自然といふ。五の数を自然といはゞ、三四も自然なり。六七八九も自然なり。故に一元氣の用や、陰陽也。陰陽は二なり。二なるものは、即一と一と也。故に陽ことゞく陽なる事あたはず。陽中陰あり。陰ことゞく陰なる事能はず。陰中、陽あり。今試に五つの指を数ふるに、母指を以て一とすれば、食指は二也。中指は三也。無名指は四也。小指は五也。小指より数れば、小指一、無名指二、中指三、食指四。巨擘五。食指よりかぞへ、中指よりかぞへ、無名指よりかぞへ、又定らず。唯、二とは前の一をかへりみて二といふ。三はまへの二をかへりみて三といふ。前を顧ざれば、二も、一三も、一四も、一五も一故に、十とは一一一一一一一。もし、九をとめて九

とし、八をとめて八となさば、又執着してそのもとをしらじ。よく一をしつて十をしらば、二三四五六七八九みな自然なる事をしらん数、実に推べきものは、一よりして九。推べからざるものは、一以前十以上。今数をいふ人、此窮をしらず。唯に己が智力を以てつくさんとす。唯、しるべきは其大数のみ。今、円にして円なるものゝごとき。実は術数の及べきにあらざり。一以前十以上によつておもはゞ得る事あらん。ふかく此数理に達せば、將に得る事あらんとす。父の父を祖父といふ。祖父のちゝを曾祖父といふ。その父を高祖父といふ、その父よりして父、是をまへに推してしるべからず。子の子を孫とす。孫の孫を玄孫とす。来昆仍雲。是をしりへに推してしるべからず。天外又外。地中又中。是を内外に推してしるべからず。西面の左は、東面の右。是を左右にしてしるべからず。是を前後左右に推して知べからず。是を終始内外に推してしるべからず。よく一の数をしる人、始て得てん。是をしらざるゆへに、天地をもうたがふ。死生をもうたがふ。つゝしんで思ざらんや始なきものは終なし。天地の説をみるべし。始あるものに終あり。死生の説をみるべし。

生化

聚れば生ず。散すれば化す。聚散生化は、一元氣の用をなす処にして、天地の常也。生じて化せずんば、天地も塞らん。化して生ぜずんば、天地もつきん。生々化々して窮りやむ事ある事なしあるは大日月、あるは海水等のごとき、常に有て、生化にあつからざるがごとしといへども、つねによく生々化々す。唯、その端を見ざるのみ。水の源を山に発し、滾々として生じてやまざるものは生々してやまざる也。海に入てみたざるものは、化々してやまざる也。井をほつて水をうづむ。その土たらざるものは、化する也。自然に其凹塞るものは、生ずる也。又一点の燈のごとき、其光宛然として動かずといへども、油氣をかるものは、下より生々する也。然してその火大ならざるものは、化々する也。たとへば木金土の類を以て器を制するや、その物をきり、その性をたちなし得たり。故に生ずるの氣なし。唯、これを持するの氣あるのみ。故に漸々に或は禿、或剋れ、或は敗、或は壞、終につくるに帰す。是生の氣繼ずして化。唯、化するにまかすれば也。化すといへども生ずればつきず。生の氣たゆれば、化の氣いたる。唯、持するの氣あつきものは久しく、持の氣うすきものは短し。是によつて天地も生々たとへばこゝに一樹あり。花を

開き、子を結ぶ。此樹もとよりこの花実を有せず。実にしからしむるもの有。此子地に落て、自然雨露寒暑の気をうけて、枝葉根幹と成る。又此子この枝葉根幹を具するに非ず。よく生々して生々のうちにも化々行る。実熟し葉落るの類、大木をなす。今頭に此大樹ありといへども、本来この木なし。又その子も本来なきもの也。且、此子、この枝葉根幹を具せず。雨露寒暑も又枝葉根幹を具せず。是一元気の作用にあらざして、なんぞ然してその薪となるや。その気あるひは煙と成、光と成、焰と成、熱と成、消散し盡して、纔に一爐の灰を餘す。その灰と成ものゝ久しふして、風吹雨湿して終にその帰する処をみず。もとは氣むすんで形をなす。形とけ、氣散じて、又跡なし。万物みなしかなり。土地山水もつねに生化する。その端微にして見がたきのみ。草木の榮枯。器物の成廢、人物の死生。その跡頭にしてみつべし。もし一箇一家の私よりしてみれば、生即生、化即化。生即生、廢即廢、榮即榮、枯即枯。然れども大に觀る時は、山はつねに老樹新樹あり。器も又つねに新古あり。人亦つねに老ありして將來。古よりして今、今よりして將來。長につねのことし。たとひ此木火にやかずといへども、生ずる処の氣つくれば、生ずる処の氣は、水の源ねに相つ持する者は生々相つぐものなふして、纔に化せずして相持するのみ。生氣つくれば、持枯る。持する処の氣つくれば、氣ありといへども、実に化すでに有人の生や、生々の氣相つぐ也。死して形猶あるものぐもの有氣行る。化すれば形つく。形つく艸木多きが為に、山たかきをまさず。沙石ゆくがゆへに、海淺きをくわへず。物誠に氣化有形化あり。此化は化生の化。生化の化と相反す。子子の水中に生じ風の人の身に生ずるがごとし。もと此物なく、又此種なしといへども、氣をむすべば形をなす。形化といへども、生の初は氣化にことならず。唯形化のもの、その始は氣化なりといふのみならず。男女構精して、よく胎をなす物は此氣也。此故に夫婦此故に夫婦遇といへども、子ある事あたはず。子あるはよく氣血相たり。同氣相感じてよく子有。又氣化にあらざるや。此ゆへに一元氣天地に在ては升降し、四時に在て進退し、万物に在ては各各の氣あり。たとへば諸味の鼎の中にあつて其熱ことよく徹表徹裡融通せざる事なく、然として各各の味を成すがごとし。万物をあけて此一元氣の貫徹せざるものなし。故によく眼をひらひて是をみれば、天地日月山河草木毛羽鱗介みな我と一鼎の内に在て、同じく薰蒸せらるゝものゝごとし。然して作用各ことなるものは、鼎中の諸味、各各

味を異にするがごとし。しらざる時は天地は自天地物。我は自物。我しる時は天地己と氣を通じ、物我と氣を同ふす。一元氣声臭の求むべきなし。散じて事物をなすや天地、日月、草木、山河、毛羽、鱗介、みな物なり。天地の推移姿態、人物の喜怒、吉凶心は人の一元氣。事忽相するゝがごとき、いづくんかまた無量、喜怒哀樂の心に跡なきによつてさるや。記する時何の辺より来るや。事みななしかなり一元氣の物に應ずる妙用をしるべし一元氣の外に心なし。心は一元氣の得て人に寓するもの。心性、情慾、知覺、運動みな氣也此氣の結んで人をなすや是人のみにあらずといえども、人をあげて餘をしら聚れるや、あつまるがゆへに此形なる。此形なるがゆへ此氣ありこのゆへに壯少の人は、壯少の心あり。老天の人は、老天の心あり此氣散ずるがゆへに此形化す。その聚りてなれるを生といひ、散じて化するを死といふ。生をしらざれば死を疑ふ。死にくらくば何んぞ生をしらん。死生をしらざれば天地をしらず。天地、死生をしらず。況一元氣の妙用をや此氣結んで人をなす。散じては此氣也。死して其神をなしとする者は、いづくんぞ天地をしらん。耳目な暫くいふ時は、得テ諸一元氣ニ歸ス諸一元氣ニよくこゝに於て了然たらば、よく道にすゝまん通とは君臣父子夫婦兄

弟朋友に処するの道也。もし此外に別に一路をもとめざらば、天をいたゞぎ、地をふむの人にあらざ

自然而使然

日陰曰陽統レ之者曰ニ一元氣一也日寒曰暑統レ之者曰レ歳日男曰女統レ之曰レ人日善曰惡統レ之曰レ心日命曰非命統レ之何曰對ニ非命一曰ニ正命一然則統レ非命正命ニ又謂ニ之命一亦可也日天曰命猶ニ曰レ命日レ令如何可ニ以謂レ命自然而使然謂レ之命一自然而使然者猶有下可ニ如之何一者上有下不レ可ニ事物みな自然にして使然もの也。人善をこのみ、惡をにくむの心は、則自然也。善をこのみ、惡をにくむは、使然なるなり。死生、榮枯は則自然也。死生、榮枯するは使然也。富貴、榮達、貧賤、窮辱、則自然也。富貴、榮達し、貧賤窮するは、使然也。たとへば水是自然水も又自然にして、しからしむるものよりひして此水ありといへども、今暫く設けいふきゝにつき、高きにとばしり、方円、長短、自然にしてしからしむるもの也。善惡、剛柔、則自然也。

善悪、剛柔をするは使然也。是をわかつて心性、情慾、意思、念慮、氣力、運動といろ／＼の名あれども、唯、あらわるゝ処に随つて、正中にたてる人、東人はさしてむかふといひ、南人はさしてそむくといふがごとし。唯、心のみにて、このゆへに心は善悪、剛柔具せざる事なし。ふれてうごけば同じき事を得ず。このゆへに又名も異らざる事を得ず。人心性情慾なき事あたはず。心性情慾をして、よく善よく悪、よく剛、よく柔するは使然也。この故に君子は自然なるものをよく養つて、使然なるにつゝしむ。此ゆへに善をこのみ、悪をにくむ事天下の人を挙て同じき心也。しかれども、利ひき私動き、好悪たゞしき事あたはず。善をこのみ、悪をにくむ。自然にしからざる事を得ず。利ひき私動くも自然にしからざる事を得ず。好悪同じからざれば、衆愚一なる事あたはず。衆愚一ならざれば千差万別。千差万別なれば、相愛し、相にくむ。その変極むべからず。その変きはむべからざれば、賢者失意、不肖者得意。賢者失意、不肖者得意すれば、禍害自をこる。しかれども善を愛し、悪をにくむの心をして失なわしむる事能はず。失はずれば、善を愛し、悪をにくむ。善を愛し、悪をにくめば、賢者得意、不肖者失意。不肖者失意すれば、祥慶自いたる。是、物有てしからしむるにあらず。又我才力の及ぶ処にあらず。自然にしてしからしむる者也。とる者は減ず。添るものは増す。自然の数なり。とりて減じ、添てますは、しからしむる也。されば、愚不肖は利をうしなひ、寵を失はん事をのみおもふて、他を顧みるにいとまなし。他をかへりみざれば、誣謗諂諛いたらざる処なし。それればまとひ、隔つればうとむ。しからざる事を得ず。上くらく、下へつらへば、みだれ、上明かに、下直ければ、まとはず。しかりといへども、君の明暗、臣の邪直、人又いかんともすべからず。算子をとつて地に擲つがごとき。三三五五、参差整齊、有意無意を以て得ず。自然にしからしむるもの也。己三を得ん事を欲して、五を得、三は我欲する処といへども、自然にして使然ものしかる事を得ず。或は三を欲して、三を得、己が欲するものと自然にして使然ものゝあふや、三を欲するものは己が私なり。三を得るものは、自然の使然也。豈己が欲するが為にしてきたらんや。五を得

るものも、自然の使然也。豈己がこのむにもとつてきたらんやこゝに於て実に一毫の私を入べからず。つゝこの
 ゆへに自然にして使然。事をしらざれば己が私をもつて天をうらみ、人をとがめ三を欲して己が私を
 以て神を敬ひ、人をよろこぶ三を得たり此ゆへにみて自然とする人は、天を恐れず、神を敬せず、豪蕩
 として自放いまゝ也。使然とする人は、鬼神に殺せられ、因果におち、入局促焉たる事轅下の狗のご
 とし。此ゆへに君子はよく自然なる物に養ひ、使然ものをつゝしむ。笛、自然にふく時の五音六律
 を具す。是をして或は宮、或羽ならしむるは、その人也。人各善悪の心を有す。よく其善心を引て
 長ぜしむれば、善のびて悪ちゞまる。久しふして悪つき、善あつまる。その悪心を引て長ぜしむれ
 ば、悪のびて善ちゞまる。久して善うせ、悪みつ。もし善悪、治乱自然といはゞ、豈この教をもちひ
 んや。もし善悪、治乱使然もの有といはゞ、なんぞ孳々としてつとむる事をせんや。君子は、天下の
 同じき心を得たるもの也。よつてこの徳化を人にをし及すを以て自任せざる事を得ず。このゆへに、
 教をつゝしむ。唯よく天下の善心を長じ、悪心を縮るものは、君子の任也。しかれども、君子なる人
 至らざる事なれば、一己に得たる処の聰明智識を以て教ゆ。故に教も又異らざる事を得ず。その教
 る所の君子は、各何とぞ海内の人をして善にすゝみ、悪にこりしめんと也。しかれども、其教る処の
 術ことなれば、是非なき事能はず。その君子己に是非を取捨せず。教らるゝ所の人、豈是非にまとは
 ざらんや。実にしる教なくんば、人道のすたれん事を。然して人の教るのかたきや、かくの如し教
 すしといはゞ、なんぞ各一道を以て教ざる者は、各みる所同じからざる也。みる事同じからざる
 ものは、己に処すると、人の教ることのかたきによる。豈是非ながらんや。是非あれば、人をあやまたざる事を得ず
 みならず、教へをうくるもかたひかな是にひかるれば、是長ず。非にひかるれば、非長自然にしてしからしむる
 物をさして命といふ。いかんとなれば、父子、兄弟各溫柔なるは自然也。溫柔なれば、和するものは

使然也。君臣も又然なり。しかるに忠にして不信邪にしてもちいらる。此君や、此臣や、人の按排するにあらざれば、自然也。自然に君不徳善をして伸しめず。臣不徳善をなさしめざるがごとき、使然也。故に君子は自然のしからしむるものに於て、己が私をもちひず。外にあるものをもとめずして、内にあるものをもとむ。遇も不遇もよくうけて、よくやすんず。よく自然の使然にする事あるがゆへ。妄意に平地に波をおこさずたとへば白刃の下の人のごとし。手をひげいく、手を下せば死す。死するは我ごろす也。死するをも命といひ、いくるをも命といひ、死するをも前定といひ、いくるをも前定といふ。唯、命といひ、前定といふ。みな平地に波をおこす也。手をひきたればいきたり。手を下たればいきたり。死生、悲歎みなしか也。この故に死生、苦楽もみなし、得ればあり。唯、天地は一毫の私をいれず。あるまま成もの也。天地、日月、草木、山河、亦一元氣是を貫通す。然して、含靈のうち、人を貴しとす。人は好憎よろしきを得、是非よくわかつ。唯一人の心は利により、私により、天下の公をつくす事能はず。千万人を挙げて同じき心は、則、天地の心也。この故に國の治乱は、つねに人心のつくつと、はなるゝに有。人心の悦ぶ処、天別に違はんや。人心のいかる処、天私にたすけんや。これ人心の外ならざれば也。然して、人々以て心とする故に、衆人みないかるは、天の怒也。衆人みな悦ぶは天の歎也。自が徳をおさむるや、天の私なきにかなへば天地したがひ、人心したがふ。人心したがへば、かれ人をころさず。己をあざむかず。是われよりして得たり。豈、命と前定とに口すべけんや。もし前定とせば、力をつくして忠孝をするも、巳をほしひまゝに悪をなすも、前程ならばとがむべからず。唯、恒はつねのまゝにうけ、変は變のまゝにうく、是命也。命とは拳々として道の通りにおこなふて、幸をうれば幸。變をうればう。こゝに於て命いかなともすべし。命を守ていかなともすべからざる命をいかなともせず。

命

自然にして使然もの事なるの跡なり。いかなともすべしと、いかなともすべからざるとを事なるをうるの跡也自然にして使然いかなともすべく、いかなともすべからざるものは、唯、そのまゝ、成ものなり。いかなともすべしものとは、事にふれ、物に応じ、各当然の則あり。此則あれば、是事触物応じ、当然而然に応ずるもの有。いわゆる其己を正しふすれば、人のりとし、徳化及せば、人自したがふのごとき。このゆへに身をおさめ、徳を施し、人に信じられ、

則とせらる。此ゆへ道達し、身達し、その福を得、故に命を長ふすといふ。命をいのるともいふ。所謂命の順なるもの也。このいかんともすべきものに於て、よく己をつくして行ふや、命誠有不可如何。いかんともすべからずとは、孝悌にして父兄にしたしまれず、忠信にして上に信ぜられず、己すでに己をつくすの外、自然にしてしかるものかくのごとし。誠にいかんともすべからざるや。所謂命の逆なるもの也。故に死生榮辱も君子に於ては是を命といふ。小人に於ては是を命といふ事を得ず。ひとしく死生榮辱にして、或は命といひ、或は不命といふものは、命はきたるまゝにしてうくべし。豈はかるべけんや。孝悌にして逐れ、忠信にして繋がるゝは、己はすでにつくしぬ。外よりきたる禍はつくせるうへはさくるに道なし。安んじてうけざらんや。禍は福と隣る。常は爰と表裡す。死は生と相ともふ。見て別とする人は、至るに及で大に驚く。みて常とする人は豫するがゆへに驚かずはかるとは足恭阿順して、身を達し、己をまげ、道にもとり、幸をねがふ。或は幸にしてよくまぬかるれば、孝悌、忠信にして世に容られざるものをみては、唾して笑わん。孝子、忠臣にして世に容られざるは命也。足恭阿順して禍なきは、幸なり。たとへおもねり、へつらひて、まぬかるべくとも、君子するに忍んや。たとひ孝悌、忠信にして、世にいれられずとも、君子豈せざるに忍びんや。こゝに人あらんに、一人は飯を食て死し、一人は鳩を飲でしなず。是を見て飯をすてゝ鳩をのまんや。我は夫たとひ死すとも飯を食て鳩をすてん。命のいかんともすべきものをしらざれば、いかんともすべからざるに於て、いかんともせんとす。飯をうたがつて鳩をはまんとすたとへば大道の遠きをいとひ、棘をわかち、茅をかるがごとし。猶、雷をさけんとて、牆をこへ、床をうつすがごとし。かくのごとくしてまぬかれたりとも、かきをこへ、床を下るの功といふべからず。端坐してうたれたりとも、牆をこへ、床をうつさるゝを以てとがめんや。利をみればおもむき、危をみればさけ、僥倖をのみもとむ。是を命をは

かるといふ。貧賤自安んぜず。富貴たる事をしらず。わづかに意にもとる事あれば、我善をなすといへども、天なんぞ報なき。天もたのむにたらず。善もするにたらず。彼悪をなすといへども、かくのごとし。命いふにたらず。悪も恐るゝにたらず。利をみてなす。いかにぞ善をなし得ん。俸をみてうごく。いづくぞ邪路におもむかざる事を得ん。故に可をみてなし、不可をみてやむ。人は禍福ともいはず。因果ともいはず。唯まとへる事の甚しきかな。君子人情に外ならず。豈こと様の道を設け、富貴をにくみ、貧賤につかんや。可をなし、不可をなさず。然して来るものはうく、来らざるものはもとめず。是を命をつゝしみ、命をうくといふ。命をつゝしむものは危きにのぞんで虎を暴にし、河を馮りするの危をおもひ、安きに居て、巖牆桎梏の難をおもふ。命をつゝしましめて、非命を致さん事を恐れてや、是を命をおしむといわんや。利を見て進んでとり、難をみて、いやしくもまぬかる。是をいかんともすべからざるものを、我に於ていかんともすといふ。ある人の曰、水火、兵戈の人に災するや、千万人をかねて一時につく。命かくのごとくなるか。曰、命とは己をおさめていたるもの也。己をおさめずしていたるものは、命にあらず。兵難に死すや、士卒に在ては命也。主將に在ては命に委してやむべけんや。水火も又豫ふせぐべき道有をすてば、豈、命なからんや。其道なふして得ば、又命也。水漲をみてわたり、火の揚るをみて往、あだを招ひて難にあふ。命としもいはんや。命又他事なし。唯、孳々として己をつくさんのみ。己をつくすの道他なし。君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友によく処するのみ。よく処するの道、古聖人に従ひ、諸賢に取捨し、偏になづまず、よく一をとらんのみ。

-
- 「元熙論」（復刻版『梅園全集』上巻、名著刊行会、一九七八年一月、初刷）所収。
 - 旧漢字は新漢字に改めたが、旧漢字の一部はそのままにした。
 - 読みやすさのために、私意により句読点をつけた。
 - 底本の文中、空白の箇所は□で表記した。
 - 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>
 - 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内「科学図書館掲示板」
<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>